慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アルバニアの風景：国際南東欧学学会第九回大会に出席して
Sub Title	Scenery in Albania
Author	石丸, 由美(Ishimaru, Yumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2004
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.2/3 (2004. 12) ,p.133(279)- 145(291)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20041200-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルバニアの風景
――国際南東欧学学会第九回大会に出席して――

石丸由美

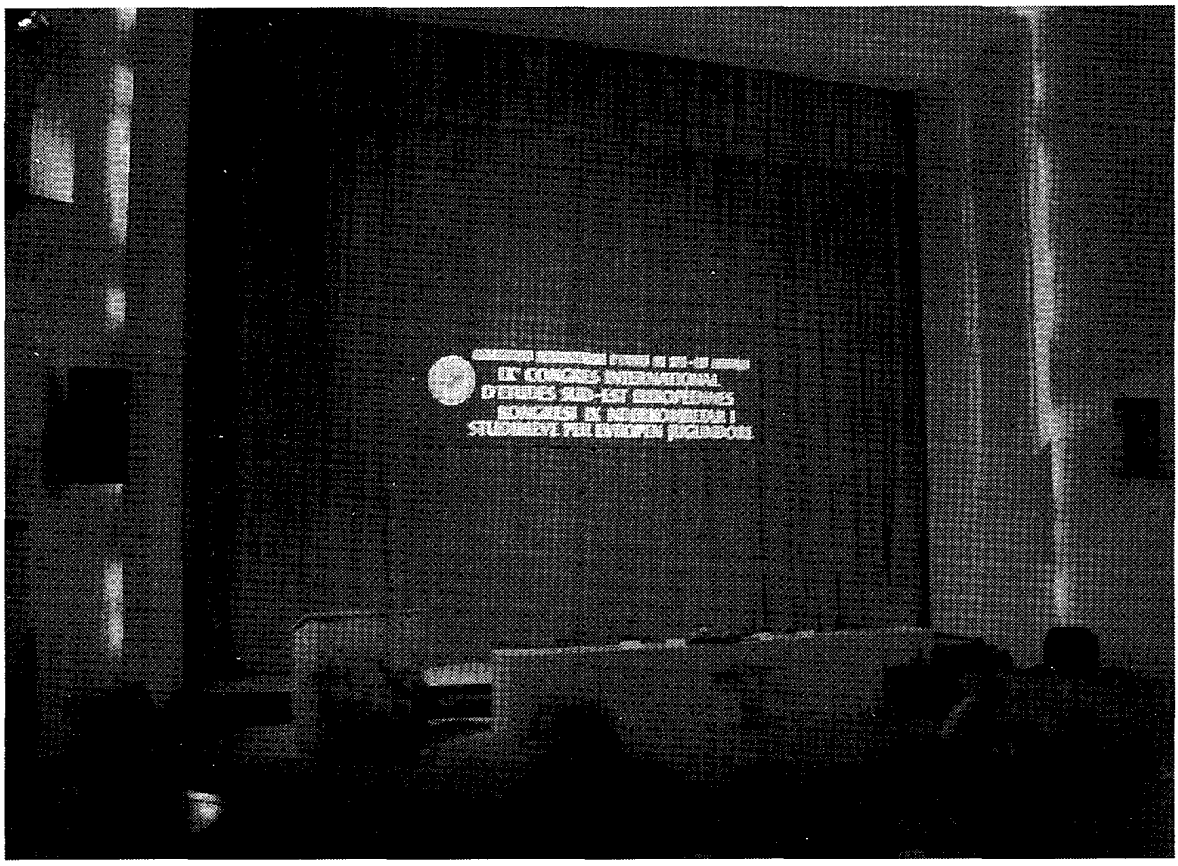
五年ごとに開かれる国際南東欧学学会も九回目を迎え、今年はアルバニアの首都ティラナで八月三〇日から九月三日まで開催された。今回は参加国三〇カ国、参加者数四一〇名を誇る大規模な大会となった。

まずはこの大会の報告を兼ねながら、〝知られざる国〟アルバニア事情について述べてみたいと思う。

一　国際南東欧学学会

「長期間にわたる南東欧の民族、国家そして国民」を大テーマに頂く今回の国際学会は、五つのセッション、さらに六つのラウンドテーブルとわかれ、ティラナ工科大学と国際会議場の二会場にわかれ開催された。第一セッションは「南東欧地政学的概念」として八部会、第二セッション「南東欧における経済発展とプロセス」として三部会、第三セッション「南東欧における社会変動と社会」として六部会、第四セッション「南東欧における共通の伝統、思想的交流と潮流」として九部会、第五セッション「南東欧の文学・芸術における『国民学派』」として五部会が設けられ、またラウンドテーブルも「ヴェネツィアの古文書館：南東欧研究のひとつの源」、「アルバニアの芸術と考古学の歴史」、「南東欧の文化遺産とグローバリゼーション」、「南東欧におけるローマ化」、「南東欧における民衆技術文化の豊かさ」「バルカンにおける言語統一の問題」と、扱うテーマも時代も多肢にわたるものであった。日本からも学会国内委員会のメンバーを中心に十二名が参加し、筆者を含む四名が発表する機会に恵まれた。

初日午前、芸術アカデミー大ホールで行われた開会式



では、大会組織委員長で南東欧学学会アルバニア国内委員会会長のルアン・オマリ氏の開会宣言に続き、アルバニア共和国大統領アルフレッド・モイシウ氏、ユネスコ事務局長松浦晃一郎氏からのメッセージが代読されるなど、アルバニア大会組織委員会の意気込みが感じられた。

午前の開会式に引き続き、午後から早速部会に分かれての研究発表となったわけだが、発表予定者が二五五名にものぼり、筆者一人で各部会に論評を加えることは不可能である。個々の研究発表については、年明け早々にも報告集がアルバニア科学アカデミーより出版されるとのことなので、そちらに委ねたいと思う。ここでは日本人の発表と、大会の全体的な印象についてのみ述べておきたいと思う。日本からは柴宜弘氏（東京大学教授・南東欧学学会国際委員）、鈴木董氏（東京大学教授）、井浦伊知郎氏（広島大学講師）、そして筆者の四名が発表する機会を得た。当初日本からの参加者は大会へ参加するのみで、発表する予定はなかったが、七月末になり急遽発表もということになり、日本におけるバルカン研究の一端を紹介するという形で各自報告をすることとなった。柴氏と鈴木氏は第三セッション、第四部会に報告の場を持ち、柴氏が日本におけるバルカン研究の歴史および現

在の、特に若手研究者らの研究成果について触れ、それを引き継ぐ形で鈴木氏はオスマン史の枠組みでのバルカン研究の状況について述べ、日本ではこの分野でも若手研究者の成長が著しいことをアピールした。両氏の発表にたいし、ヘブライ大学教授でトルコ民族主義研究の大家でもあるヤーコブ・ランダウ氏からは、こうした日本での豊かな研究成果を、日本語だけではなく欧米語でも積極的に発表してもらいたいとの意見を頂いた。また北大スラブ研究所に客員研究員として滞在経験を持つ研究者（ブルガリアからの参加者。名前は失念したが）は、日本の大学院生クラスの研究レヴェルが高いこと、特に現地語の読解力が優れていることなど、両氏の発表を後押しするような意見も頂いた。確かに、現在ではいかに優れた研究をしようとも、それは世界に発表して（欧米語及び現地語で発表するということ）初めて評価されるものであり、ランダウ氏の意見は今後、研究者らの課題となろう。これに関して、今回私自身も痛感することがあった。というのも、今回トルコからの参加者の一人でトルコ近現代史を専門とするブレント・ビルメズ氏（イェディテペ大学）は、私がかつて『日本中東学会年報』に掲載した論文の僅か二ページほどの英文サマリーを読み、私の研究に興味を持っていてくださったという。うれしい限りであった。サマリーの重要性はもちろん、やはり研究成果を積極的に欧米語（あるいは現地語）で発表する必要性が実感されたしだいである。ただ日本の研究者の中には積極的に外国語で研究成果を発表する動きもあり、今後が大いに期待される。

同じ第三セッションの第六部会で発表したのが井浦氏である。井浦氏は「日本におけるアルバニア学」というテーマで発表した。日本でこの五十年間に出版された本の中でアルバニアについて触れたものが七十種、そのうちタイトルに〝アルバニア〟という語を含むものが十四種であるという。〝知られざる国アルバニア〟という認識を持っていた私にとっては少なからぬ数という印象を持った。またアルバニアの国民的作家イスマイル・カダレの小説が、フランス語版からの翻訳とはいえ日本語に翻訳されていること、それも五冊も出版されていることを知り、自らの不勉強さを痛感するしだいであった。同じく第三セッションの第五部会で発表したのが筆者である。「シェムセッディン・サーミーとオスマン主義理念：『オスマン国民』の多元的概念」というテーマで、十九世紀末アルバニア民族運動の担い手の一人であるサ

ーミーの思想、行動を、オスマン主義という国民理念の中で再検討しようとしたものである。ティラナ大学のメムシャイ教授から質問等もいただき、個人的にも非常に貴重な体験となった。

次に大会の全体的な印象について述べたいと思う。発表予定者二五五名とのべたが、当初九〇分予定の部会に七～八名の発表者が組み込まれており、非常に驚いたが、実際は発表辞退者も多く、それぞれの部会平均四～五人の発表となり、おおよそ時間内に終えることができた。辞退者を見越した数だと考えれば納得がいくものであった。また会場が二つにまたがり、途中部会会場が変更になるなど、わかりづらい面もあった。部屋や入り口を示す表示等の不足も気になった。また発表において機器の使用がスムーズに行かず、最後の閉会セレモニーも予定していた芸術アカデミー大ホールの機材の不具合のため、急遽アルバニア科学アカデミーホールへと変更になるなど、メカニックな部分でも問題もあったと思う。しかしながら、全体としては大した混乱もなく成功裏に終わったと言うことができよう。また各国からの参加者に対し、科学アカデミーの職員がわざわざ空港まで出迎えてくれるなど、温かい歓迎を受けたことも記しておきたいと思

う。

二　ティラナへ

次にティラナの町の様子について述べてみたいと思う。周知のように一九九〇年に民主化の波がアルバニアにも訪れ、およそ五〇年にわたる労働党一党独裁体制が崩壊するわけであるが、直後の大規模ストライキや国外脱出劇に見られる政情不安、九六年末のねずみ講事件、あるいはコソボ紛争への関与など不安定要因は続き、この四、五年でようやく落ち着きを取り戻したといってよい。この国を訪れるにあたり、日本からの同行者がいるとはいえ不安がなかったわけではない。不安を抱えたままウィーンからティラナ行きの飛行機に乗り込んだわけだが、たまたま機内で隣に座っていたアメリカ在住のアルバニア人は、私を一人旅と思ったらしく、「気をつけるように」と忠告してくれた。氏が四年前一時帰国した際、とても危険な目にあったという。氏自身も緊張しているかのように見えた。アルバニア語を話せるアルバニア人の忠告により、アルバニア語の話せない日本人の私の緊張感は一層高まった。とはいえ、飛行機の窓から見える、アルバニアの風景は、緑深い険峻な山岳地帯の様であり、その自然の景観を見ていると〝政情不安〟や〝危険〟という言葉が嘘のようでもあった。

ウィーンからおよそ九〇分で飛行機はティラナ国際空港（リナス空港）へ到着した。アドリア海岸までおよそ車で三〇分ほどの場所にある飛行場だが、飛行機の窓からの風景同様、近くまで高く険しい山並みが迫り、「アルバニアの二／三は山岳地帯である」という言葉が妙に実感された。飛行場には科学アカデミーのアレクサンドラ・ジャモさんが出迎えてくれ、私たちをティラナのホテルまで連れて行ってくれた。飛行場からの道は舗装されていたとはいえ、対面通行の、とても一国の首都の空港に通じる道とは思えないものであった。しかしこの道も途中ティラナとドゥラスを結ぶ幹線道路（高速道路）に合流し、市内までは比較的快適な車の旅となった。

ティラナ市は二〇〇三年現在で人口三五万人、東西に八キロ、南北に四キロほどの都市である。市の中心部にはスカンデルベグ広場があり、アルバニアの民族的英雄スカンデルベグの銅像がその勇姿を見せている。かつて、スカンデルベグ像の向かいには金箔で覆われたエンヴェル・ホジャ像が建っていたが、一九九一年に倒され、現在では子供用の遊具が設置され、夕方になると子供づれ

の家族が訪れ、ひと時を楽しんでいる。そこから南のマザーテレサ広場まで延びる道路（民族殉難者大通り）約一五〇〇メートルの両側が官庁街となっており、各省庁、首相官邸、大統領府、議会、各国大使館などが立ち並んでいる。またこの通りの西側一体にはおしゃれなカフェが立ち並び、人々は午後の時間をコーヒーやビールを飲みながらすごすのであり、この地区を見る限り、自分がアルバニアにいるのを忘れてしまいそうであった。それに対しスカンデルベグ広場の北側は庶民的な町の様子を示していた。北側八〇〇メートルほどのところにティラナ駅があり、また近郊へのミニバス乗り場などもあった。広場の東側には中央市場があり、野菜、果物、乳製品、魚、精肉を扱う店舗が立ち並んでおり、活気を呈していた。ティラナの主要な道路や広場には一般に民族的英雄の名前が付けられているが、あるとき地図を見ていると、面白い名前に気が付いた。「ムスタファ・ケマル・アタチュルク広場」である。ムスタファ・ケマル・アタチュルクとは紛れもなく、トルコ共和国の建国の父で、初代大統領、そして「トルコ民族」を強調することで国家の一体化を図っていた、トルコの〝民族的英雄〟である。彼の名が首都ティラナの広場の名前として冠されている

ことに、最初戸惑ったが、実はアルバニアではアタチュルクの母（ジュベイデ・ハヌム）はアルバニア系であるとされており、そのためであろうか。トルコ、アルバニア双方で英雄（？）とされるケマルをみて、ナショナリズムの複雑さを改めて感じ入った。

アルバニアは共産主義時代の一九六七年にあらゆる宗教活動が禁止された。一党独裁支配が崩壊し、一九九〇年に個人的な宗教活動が認められたが、今回の旅行でも宗教復活を示す風景を目にすることができた。市内にはスカンデルベグ広場に面して建つエセム・ベイ・モスクを含め、四つほどのモスクがある。礼拝の時間になると町の四方のモスクからエザーン（アザーン）が聞こえるといった、中東諸都市のような風情はなかったが、金曜日の正午の集団礼拝時には、広場に面したエセム・ベイ・モスクに人々が集まり、モスクの外にまであふれるほどであった。また六〇年代に破壊されたキリスト教教会も修復されている。また今回訪れることはできなかったが、市内にはイスラーム神秘主義教団のテッケ（修道所）も三つほどあり、現在活動を行っているという。

三　書店事情と国立文書館

今回のアルバニア訪問の目的は学会に参加することと、本および（願わくば）史料となるものを集めることであった。書店情報がほとんどない中、唯一知っていた本屋はといえば、ガイドブックに載っていたアドリオン書店（スカンデルベグ広場）であった。扱う本は新刊本のみで語学関係から、経済、工学、歴史、文学と多肢にわたるが、私にとっては十分ではなかった。その他アルバニア書店（サーミー・フラシャリ通り）は、規模としてはアドリオンより少し大きく、語学関係が充実していたように思われる。ただ両書店とも外国語タイトル（英語、その他欧米語）の本を扱うことをセールスポイントにしていることから、アルバニア人学生の外国語学習熱は感じられるものの、私にとってはあまり興味を引くものではなかった。両書店よりは科学アカデミー出版局販売所（ムラト・トプタニ通り）、やリブリ・ウニヴェルシタル（アブドュル・フラシャリ通り）のほうが、アルバニア語書籍が充実していた。ただ両書店とも扱うのは新刊書のみであり、たとえば二〇年前、三〇年前の本を探すのは至難の業であった。古本を扱う書店を探したが、教え

てもらったのはまるでキオスクのような小さなスタンドショップであり、おまけにその店は閉まったままであった。古書市場が確立していないことは、科学アカデミー出版局のデポを訪れたときにも感じられた。大会最終日に前述のアレクサンドラさんに、アカデミー出版局のデポに連れて行っていただき、そこで本を探すことにした。アルバニアでは総じて本は高価である。特に辞書などは一冊六〇〇〇レク（約六〇〇〇円）もするものもあり、アルバニアだから本も安いだろうと思って〝お買い物三昧〟を楽しみにしていた身としては、少々がっかりさせられた。ともあれ、「高い」と思いながらあれこれ物色していると、探していたアルバニア民族運動関連の二巻本の資料集（一九七一年）を見つけた。さぞや高いだろうと思って、値段を尋ねると、五〇〇レク（五〇〇円）だという。出版当時の値段が一〇レク、一六レクであるから、それに少々物価上昇分を足しての値段であろうが、他の本に比べあまりにも安く、本来なら古書として新たな価格を設定してしかるべきなのに、あくまでも売れ残り本としての価格しか与えられていない。古書が安いことはうれしい限りであるが、かつて出版された本が、一度絶版になるや、特に外国人にとって入手不可能になるのは非常に困るので、アルバニアにおいてもある程度の古書市場が確立するのを願うしだいである。

次に研究施設について述べたいと思う。アルバニア歴史研究のためにまず重要な研究施設として挙げられるのは国立文書館であろう。近年二巻本のカタログが出されている（*Udhëzuesi i Arkivit qendror shtetëror : fonde personale dhe familijare*, Tiranë, 2000 *Udhëzuesi i arkivit qendror shtetëror : fonde të institucioneve Qendore të Administratës Shtetërore*, Tiranë, 2001）。市内北部の駅近くにあり、私個人は今回訪れることはできなかったが、ここを利用するためには文書館からの研究許可（時間がかかるとのことであったが）が必要であるとのことである。が、これはある程度表向きの説明であり、個人的なつてなどで便宜を図ってもらえる場合もあるとのことである。市内中心部のスカンデルベグ広場には国立民族図書館もある。

四　郊外へ

アルバニアへ来たからには、ティラナだけではなく地方都市へも足を延ばしたいと考えていた。大会主催者側が用意してくれたエクスカーションはデュラスかクルヤ

であったので、エクスカーションでクルヤへ行くことにし、デュラスへは個人的に日本人同行者らと共に行くことにした。九月一日、午前の部会終了後、私たちはデュラスへ向け出発した。

デュラスはアルバニア第二の都市であり、アドリア海に面するアルバニア第一の港を有する港湾都市である。ティラナからデュラスまでは約四〇キロ、車で三〇―四〇分の距離にある。この両都市間には高速道路が走っており、車窓の風景を楽しみながら、市内へと入っていった。ギリシャ植民都市として紀元前七世紀頃からの古い歴史を有するドュラスには、考古学的な遺跡も多く残されている。特にローマ時代の円形劇場はバルカン最大級であるとされ、現在観光の目玉にすべく修復が進められていた。また海岸近くには小高い丘があり、その頂上には一九二二年から一九三九年のムッソリーによる占領まで、アルバニアを大統領としてそして国王として治めていたゾグⅠ世の夏の別荘がある。そこから眺めるアドリア海は格別であった。中心部から車で一〇分ほど南に行くと、そこには美しいドゥラス・ビーチが広がっていた。海の美しさといい、海岸線沿いに立つホテルやアパート群といい、他のヨーロッパ・リゾート地の水準と肩を並

アルバニアの風景

べるものであり、そこだけ別世界のようでもあった。ティラナへの帰路は、高速道路ではなく一般道を通って帰ることにした。途中目にする風景は川が流れ、緑豊かな田園風景であり、心和むものであったが、いたるところ放置されたままのブンカー（トーチカ）があり、改めてここはアルバニアであることが実感された。

翌日、午後はクルヤへ向け出発した。クルヤはアルバニア人にとり非常に重要な歴史的な町である。ティラナの北西二九キロのところに位置し、「スカンデルベグ山の南崖にへばりつく」と形容するのがぴったりの町である。多くの泉と川に恵まれ、アルバニア語で泉を意味するクルア（Krua）にちなんでクルヤと名づけられたという。紀元前からの歴史を持つとされているが、この町を有名にしているのは十五世紀オスマン帝国の支配に公然と反旗を翻したスカンデルベグの本拠地であったということである。スカンデルベグは〝民族の英雄〟として特に十九世紀のアルバニア民族復興期において、あるいは現在までも民族統合のシンボルとして扱われている。他のバルカン諸民族において、例えばセルビア人にとってのステファン・ドゥシャンのセルビア帝国、ブルガリア人にとってのボリス王時代のブルガリア帝国など、民

族統合のシンボルとして持ち出されたものに中世期の帝国があったが、このような中世の国家を持たないアルバニア人にとって、スカンデルベグという個人が、その役割を果たしている。スカンデルベグはもともとキリスト教徒である。双頭の鷲が描かれている現在のアルバニア国旗も、もともとはスカンデルベグの旗で、アルバニア人がカソリックと正教に分裂したことをシンボライズしたものとされている。アルバニア人としてのアイデンティティの一つを中世に求めるなら、当然のことながらキリスト教徒という問題もかかわってくるはずであるが、現在七割強がムスリムとされるアルバニア人において、当然スカンデルベグ、あるいは中世アルバニア人のこうした部分は問題にされていない。この部分を覆い隠すように、この時期この地域に進出してきた〝トルコ人〟の残虐性がことさら強調されて、その〝トルコ人〟に抵抗した〝アルバニア人〟英雄スカンデルベグ像が作り上げられていったように思われる。事実クルヤで訪れたスカンデルベグの城砦の中にある博物館では、お定まりのように、〝残虐なトルコ人〟と彼らと果敢に戦ったスカンデルベグ率いる〝アルバニア人〟の物語を延々と聞かされることとなった。

またクルヤはイスラーム神秘主義教団であるベクタシー教団のバルカンにおける拠点のひとつでもある。町中に一つテッケがあり、共産主義時代には閉鎖されていたが一九九二年から活動を再開しているという。スカンデルベグ山の頂を見ると、ポツンと一つだけ建っている建物が見えた。とても歩いていけそうもないような場所に建っている建物も、同行したナタリー・クレヤー女史（ベクタシー教団研究の専門家）によると、テッケであるとのことであった。

五　再びティラナへ

アルバニアに滞在した一週間はあっという間に過ぎてしまった。最後に全体的なティラナの印象を述べておきたいと思う。ティラナは人口三五万人を有する町であるというが、町を歩いた印象としてはトルコ・アナトリアの地方都市という感じであった。町中の看板がアルバニア語で書かれていることを除けば、あたかもトルコの地方都市にいるかのような錯覚さえ覚えた。トルコを始めとした中東社会では外国人、特に女性は好奇の目にさらされる場合が多いが、ここアルバニアは共産主義時代を経験したせいか、一人で歩いていても、じぃーっと見ら

れることもなかった。最初危惧していた町の安全性についても、なんら問題ないように思えた。ただ近年車の数が増え、交通法規を守らないドライバーがほとんどという中では、道路を渡るのに命がけではあったが……。それよりも、ギリシャ同様昼休みの習慣を持つこの地で、朝九時から午後二時頃（一部午後六時から午後九時頃まで）まで働き、その後町のカフェでコーヒーやビールを飲んでくつろいでいる様を見るや、うらやましくも思えた。また夕方涼しくなるや、どこからともなく人々がスカンデル広場を始めとした市の中心部に集まり、散歩を楽しんでいた。これは昔からの習慣らしく、夜の九時か一〇時頃まで続くのであった。アルバニアという国は確かに貧しい国であることに間違いはない。しかし貧しくとも町行く人々に悲壮感やすさんだ感じはまったく感じられなかった。確かに道路などの社会的インフラの整備が遅れているのも事実であるが（ただし携帯電話など最新のテクノロジーはそれなりに普及していた）、徐々にそうした問題もすべてこれから解決に向かっていくのではないだろうか。

（追記　一三六頁の写真は、日本女子大学講師木村真氏の撮影によるものである。）